權少教正野崎善閲正
故大講義星島良平原稿
中講義三宅重造註釋

道乃栞俚諺解 全

明治十七年
十二月出版
朝陽堂出版

特35
879

東京帝國大學圖書之印

道の綱領

減を取て升を求
生々主眼

活物を提えよ
陽氣丹たふまじ
離我主眼

我を離まじよ
自然によ住きてよ

特35
879

權少殿野將在善閲正
故大講義日生島良平原稿
中講義三宅重造註釋

道學俚諺解 全

明治七年
十二月出版
朝陽堂出版

道の綱領

誠を取升生家
生々主眼

活物を提えよ
陽氣丹ふまえ

離我主眼

我を離れよ
自性よ住きよ

東京帝國大學圖書館藏

養心法

心ハ大盤石の如くなし

然ル

養氣法

氣ハ常ハ虹の如く雲霞

〳〵ときよ

我を離るゝ細目

是欲ハ成まじ

無心を主とし

無欲ハ成まじ

人智を捨て

無欲ハ成まじ

聚散苦労をすれ

是ハ事をしれ

疑惑を去て

下の止擬作を

病を去て

大切ハ勿れよ

念をつくすよ

如房事まじ

活物を捉えるの細目

善の羅を作るの事　邪陽より派起の事

何事活上する盤　心の角をとられ

雖を有すること　息すら陽事を

陰事を言事　本後て息をきよ

出分を傷めるの事

我を離るの要言

不足の起たら裸

生れ出て昔を忘へよ

活物を捉えるの要言

毎朝毎晩　生を変こ

神拜の要言　日拜をよ

往病疑ひ　言ねも

四方を見ぬを

活物を捉えるの総括

活物とは息する物と言ひて人間も物論も畜類も動くこと天照る神の徳三六時中鼻と口より通ひ故生て居ること何ぞ有難くそれ事でハ居られぬ

我を離るるの総括

迷ひとは慮寄ると申て人の心の迷ふ時を云へつまり迷て為ん慮ぶ寄り集りて拵の因果なりを結ぶ縁ハ形なぬぞ

明治十七年十二月吉日

元堂拜書

道乃栞俚諺解

緒言

本教ハ道と教との別て有れども教て天より起り道て自然と天より顕るゝとハ其本源ハ皆天より出る事を明し給ふふり故に斯道ハ諸道に卓越する事言を待ず教て皇大神の御教道て日神の大道造物主て日神の働きなりとの神傳ハ實に本教の三綱領にして忠孝の基本ふり誠を

取外すか天に任せよ我を離れよ陽氣になれ活物を捉えよ此五事を五條目とす扨又道の順序ハ誠を取外すか活物を捉えよ陽氣に成れ我を離れよ自然に任せよ心を大磐石の如く押鎮め氣分ハ朝日の如く勇ましくせよ此六ケ條ハ是即ち道の溫奥を蓄育し天地の妙用を包含せるを環の端無きが如く誠ハ九事にして限り無き活物なり活物を陽氣なり陽氣に成るハ我を離るゝにあり我を離るゝハ自然に任すにあり故に自然に任せて我を離れ陽氣に成りて活物を捉えたるが直に日神と御一体なり自然に任せて我を離れたる効驗ハ心が大磐石の如く鎮るなり陽氣に成りて活物を捉えたる効驗を氣分が朝日の如く勇ましくなるなり心が鎮まり氣分勇ましき中より出る一念即ち道の誠なり誠ハ天人の道の本体にして神人不二の霊寶な

り道の誠も正直かふり正直に明りかれも日神と
同ど心かり爰に至て始めて道の蘊奥を悟り天
地と共に樂しまむ誠に誠に有難き事斗りかり

東京帝國大學圖書館藏

道乃栞俚諺解

一名道乃三十言

教祖神遺教　大講義星島良平原稿
中講義三宅重造註釋
權少教正野崎在善閲正

誠を取外せな
斯道の誠ハ我を離れ活物を捉える間ゑ生せ

る活物なり我を離れたる効驗ハ心ゞ大磐石の如く鎮るなり活物を捉えたる効驗ハ氣分ゞ朝日の如く勇ましくるる也心大磐石の如く鎮り氣分朝日の如く勇まーき中より浮む一念ゞ即ち正直の誠なり正直の誠とハ水火兩靈の靈機を云此誠ハ天人の道の本体よーて天地ゑ遍滿せる日徳の陽氣より生ゞ誠は丸事ぎと諭ーー給ひーー陽剛の徳ゞ即ち本心の誠ゑて其誠を取外さぬゞ人さる者の天職なり誠ゞ天人の大道をる事を知り心ゑ悪ーきと思ふ事を身ゑ行をぬ様ゑ致ー人の見ゞ聞うざる所ゑ誠慎ーて自他を論ぜゞ萬事我ゞ家事を取扱ふ如く働く者ハ誠を取外さぬ人と稱すゞー

活物ゑ捉えよ

活物ハ天心なり人心なり捉えよとは其明徳

を會得するの謂なり本心ゞ形の欲ゝ引うゝと其明德を失ふ故ゝ形の欲を離れて正直のひとつゝ止り能く靈無養ふ時ゝ天地と一体ゝなり即ち天地の活物を呼出し活物を捉える教語を覺語する所あるべし

陽氣ゝ成ゝ

陽氣ハ日神乃陽德光明温暖の大氣なり其陽精陰靈ゞ凝結て萬物の形となり心となる故ゝ人の心ゞ嬉く面白く勇ましくなる時ゝ天地ゝ遍滿して快活の元氣となり陽剛の德身躰ゝ充ち滿るゞ即ち陽氣ゝ成るなり

我ゝ離ゝ

我とは物ゝ對するの名稱離ゝとは物我の隔て無きを云譬へは世務經歷上萬事萬端少しも已ゞ私意を交へゞ一切天ゝ任せて誠は人の天職たる事ゝ心ゝ思ハ定めて日用を大

切に勤め愛惜嗜欲名聞我慢思慮分別を捨人智を去るゞ我を離れたるなり

自然に任せよ

自然ハ即ち天道の自然にて四時循環せる天造地化の功用を云ふなり自然を不揃ひと云教語あり陰陽水火男女牝牡悉く背反の物ふらざるハ無し此二ツの物を合せて萬物ゞ生ぜるふり其廣大にして測り知らるぬ妙用ゞ

即ち自然にして任せとハ疑ひも無く我もふく只大道に從ひて誠を行ひ已ゞ受得さる分限に任せ心茂安んずるゞ自然に任せたるふり

心を大盤石の如くにして鎮め氣分ハ朝日の如く勇ましくせよ

心を大盤石の如く鎮めるハ如何れる患難流離の際に於ても本心の神を動らさゞ身躰の

中府ニ鎮めてをる事なり氣分ハ朝日の如く勇ましくせよとハ夜陰の氣を拂ふて出る朝日の登り玉ふ如く勇ましき中ニ麗敷氣を十分ニさし含み以て陽精陰靈を養ふ事ふり此段ハ前段の小結束ニ活物と陽氣と收束すれは單ニ活物となるれり我を離れ自然ニ任せを收束すれバ單ニ我を離るゝニ止る心の大磐石の如く鎮るハ我を離れたる効驗なり氣分の勇ましくなるは活物を捉えさる効驗ふり

無欲ニ成れ

此条より以下十条ハ我を離るゝ細目なり無欲とハ無我の事ニて成れとハ私心私欲を去り非分の望を離れ平素日用の上ニ於ても衣食住其他一日も欠ぐべからざる物を大切ニ扱ひ何事も私意ニ蔽れぬ様ニ致し已ゞ受得

たる分限ニ任せ只今日を有難く勤め正直の誠を本として獨を慎み身を修るゞ我を離るゝ初歩なり

無念ニ成る

無念とハ愛惜嗜欲雑念を去り形の事を忘れ只有難く嬉しく勇ましく其日其時の心ニなり見ては樂しミ聞てハ樂み天地と共ニ氣を養ひ胸中を清らかニして少しも間もゆるなく穢れぬ様一心を澄して餘念なく一筋ニ道を樂めば即ち無念ニ成り無欲ニなるの基なり

足る事を知れ

足る事を知るとハ足らぬを知る事なり食事も腹八合と云譬の如く萬事ひかへめニして其上ニ何事も天命ニ任せ天理ニ順ふて道を勤る時ハ天ハ無禄の人を生まゞ又無用の物

を生ぜば鷄犬牛馬に至る迄皆夫々足る事を知りて其外を願ぐ人を萬物の靈長なるべ天命の儘に誠を勤れば即ち足る事を知り無念なるべし

天の御擬作を大切に勤めよ

天の御あてがひとは士農工商とも皆夫々の天職あり農は耕作を精出し工は利器を以て其業を能々商は物品を撰み正直に捌き士ハ已が分を尽して廉耻を磨勵し天地に愧る事なく善に進み悪に陷らぬ公事を營む事の如く善悪共に有難く勤めて心鏡に曇りの懸らぬやう其分を尽して足る事を知るが大切に勤る也

安房に成る

安房とハ知覺もなく思慮分別も無く貧富寒暑とも知らざる者を云ふ常人にして天に任

せは斯くの如き行為を成るを安房なれと云ふ赤子の心ゐ成ればといふ教語の如く只何事も天ゐ任せ孝子の親に従ふ心となるべし古語に君子容貌愚なるが如くと云へり故に我を離れて萬事日月ゐ打任せいつまでも小供の心を離れば安房に成るが天の御あてがひを大切に勤るといふものなり

慢心を去る

はんしんとハ心が満て溢るゝ時を慢心を生じて安房に成れば人を眼下に見下して道に外れ又神明の御心ゐも隔てが付き萬事誤りの出来るハ皆我が慢心なり故に毫末も慢心の無き様本白地になりて心に叶ひ道に外れ容貌愚なるが如き君子の人となるべし

人智を去て天に任せよ

人智を去るとは捷給巧利の思慮分別を去る

事を云總て人の為せ業ハ限りゞあり天道
は公明正大ゝして極り無し故ゝ捷給巧利の
人智を去て自然の生物を自然の天命ゝ任せ
無為無極の道を樂むゞ人智を去て天ゝ任せ
なり人智はたとへバ小供の小力細工をする
ゞ如し親の見る時ハ至てあぶなし天の御心
も同様なり人智を去らざれバ天ゝ任せ難し
取越し苦勞をせなり

取越し苦勞とハ思案先繰ゝていらざる心配
なり
是形ゝ付て起る我の身構へより無益の事ゝ
心を費やせ事なり故ゝ我を離れて誠を勤む
る時ハ少しも苦になる事なし天道ハ自然の
道理ゝて跡もなく先もなく今ゞ今の事のみ
思ふゞ斯道の本意なり道をたとへバ蜻蛉の
竿頭ゝ止るゞ如し無為自然の樂みを樂む時

を人智を去て取越し苦勞をする事なし

臆病を去る

臆病とハ胸の病なり臆病より心痛胸痛を發し陰氣になり陰氣より諸病とゝる故ゝ勤めて臆病を去り形の事を忘れ有難く嬉しく面白く勇ましき天地生々ゝ元氣を養ひ天地と一体ゝゝる時を心ゞ強く太く大丈夫ゝゝり物ゝ驚く事れく物の苦ゝ成る事無し誠ゝ有難き樂しみの心計りゝゝるさすれば取越しの苦勞ハ止むて臆病の起る事無し

念ハ継ぐなし

念を継ぐなとハ鬼角何事を入りくまぬ様ゝ相考へ初念を大切ゝせよとの教語を味ひ見るべし念を継ぐハ私心より起る忘念なり初念ハ本心の誠なり道は只一心を澄して誠を勤むるの外ゝし誠なれバ明らゝゝり心明ら

なる時ハ天照大神我一心ニ顕を給ひて運を
添へ玉ふ事疑ひあるべからず彌以て疑ひ無
なれば無我無念となり念を継ぐ事なし念を
継ぐ事なければ無欲ニ成るれり此段を以て
我を離るゝ細目の終りとを

善人の罪を作るな

此条より以下九条ハ活物を捉える細目なり
善人の罪を作るなとハ人ニ對する教語なり

世ニ善人と稱する程の人ハ多く陰氣ニて氣
を枯らし遂ニ形を失ひ衆善人の御玉を痛め
穢し天道は是耶非耶乃歎を發せしむる事多
し大神ニ對し奉りて此上の罪となるべからず
故ニ天の生み玉ふ我が誠の玉を大切ニ活
して衆善人の罪を作るべからず

何事も活かし上手ニ成ル

何事も活らし上手ニ成ルとハ人ニ接するの

際何事もよき方へ取直して人の心を殺さゞ
穢さゞる様に取扱ふべしたとひ人が悪事を
仕向て来る共此方には綿を以て受けよきの
教語を思ひ活き誠の心を以て人に交り物に
應ずる時は悪人も善心に翻り禍を轉して福
と為すべし一言にても事を破らぬ様によき
に取直して感服せしむるが何事も活らし上
手に成るなり

難あり有難し

難あり有難しとは如何なる患難流離の憂苦
に逢ふとも本心を鎮め氣を屈せゞ有難き一
心を動かさぬ時は人も其艱難に撓ざるを觀
ては感じ聞ては感じ人の心を活かすなり爰
に心のみにして形の事を忘れ萬事天命と覺
悟を定めてをる時は難のあるも苦しからざ
るなり教祖曰三十年以前の大難が今此幸と

なる難さへ有難いに相成と仰せられしあり

陰氣を去れ

陰氣ハ陽氣の反對よして陽氣弭と陰氣強る

なり陰氣の勝つハ穢なり穢を氣枯よて大陽

の氣を枯らせハ陰氣なりぼられ悲しれ情る

い乏しなれば陰氣の鍾るなり有難れ嬉しれ

面白れば陽氣の満るなり依て陰氣ハ拔らひ

除き内外清浄一心乱まざる様日神と我が心

を一つよして少しもゆるみなく陽徳が満る

時難あり有難き事を悟れバ陰氣の起る事な

御分心ハ痛めな

御分心を痛めかとハ已が本心ハ天照大神の

分心なまバ仮りよも穢を事なく有難き一心

を養ひ造次顛沛よも彼の丸き御形の有難き

陽徳をもるめぬ様よ御分心の御守りをする

心よりてをる時ち限りのなき命ハ心の神
といふ事を悟る所あるべし道ハ只心一つよ
て外よ求る道をなし夫故道よ心をむ時ハ陰
氣去て御分心の痛む事なし

邪陽よ泥むな

邪ハ正よ對する詞よて正陽ハ即ち日の神我
本教よ尊信をる大神なり邪陽ハ心迷ふ時よ
信ずる倚頼神なり心正しきを得ざる時物よ

泥むハ人情の常なり泥むハ我なり泥まざる
を活物なり斯道ハ日の神を目當に修行して
日徳の廣大なる有難き事を体認して天地の
活物と已が活物と一体よなり心正しきを得
るが肝要なり邪陽とハ流行神の神憑巧發奇
中の類をも云又斯道さりとも禁厭を施し靈
驗顕れざる事あるる時心が煩悶上氣して一心
の疑結霊驗を顕す事あり其霊驗よ執着をる

を邪陽ゝ泥むとも云ふ是ハ本教の神徳自然
れ霊験ゝあらぴーて迷慮ゝ生ずるゞ故俗ゝ
シコルと云ふ執着心ゝ憑據をるシコの禍津
神乃類を云ふ俗諺ゝ鰯の頭も信仰うらと云
鄙言ハ却て疑念ゝ起き正直心ゝより發する實事
を指を比喩の詞ゝるゞ故迷慮の邪陽とハ自
ら異なる所あり能々此教味を嘗て咀嚼をれ
バ自ら省察了得をる所あるゞ

心の角城取を

心の角を取れといハ水火兩霊の凝結れるもの
ゝて其本体を明と云ひ其妙用を誠と云誠を
丸事にーて本熱れ丸を明らうゝる活物なり
其渾然たる心ゝ角の出来るハ心ゞ形ゝ引う
るゝ故言葉ゝも眼ゝも聲ゝも顕をるゝ觚稜
なり依て人欲を去り物我の隔なく正直ゝ明
うをれバ日神と同ど心なりとの教語ゝ基き

心の本体を能く知り正直の誠を以て日神の御心と一体なる時は邪陽に泥み心は角のぼく事なし

怠らば御陽氣を吸へよ

怠らば御陽氣を吸へよとは即ち活物を養ふなり活物は心なり心は日神陽剛の徳を受て備へたるものゆゑ晝夜間断なく陽氣を吸ふて活物は養ひ陽氣体中に満る時は即ち天地の元氣と一体なる古語に陽氣の發する所金石皆透るとは陽剛の徳をいふなり教租冬至の朝有難く嬉しく思へば日光を呑み給ひて活物を養ふ事を教へ玉ひしなり此段と次段とは心理に係らざる活物なり

下腹で息をせよ

下腹で息をせよとは心神を臍下に鎮る事なり下腹で息をする時は常に陽氣が下に鎮り

水氣ガ蒸發ー氣血ガ循環ー心ガ鎮リ氣分ガ
勇まーくるなり其中より浮み出るの一念
即ち道の誠よーて其妙用ハ測ル知られぬ天
地の活物と一体よなるなり天地の活物と一
体よなる丸妙を得るハ下腹で息をするガ肝
要ぞり此段ハ活物を捉える細目の終りなり
不足ガ起つまら裸で生まさ昔ハ思へよ
此一條ハ我を離るゝ要言なり不足の起るハ
皆本を忘れぬガ誠を勤むるの本なり何事も
本を顧ミる時ハ有難ひ事斗りよて不足の起
る事なー裸で生れさ昔を思へとは本を忘れ
ふとの御教なり國の本は家よなり家の本ハ
身にあり身丸本ハ父母よて心の本ハ日月な
り故よ心を養ひ本を大切よをる時ハ不足の
起る事なー
毎朝ー生を變さ心地て日拜をせよ

此一條ハ活物を捉える要言なり毎朝々々生を變ず心地で日拜をせよとは毎朝早く起き身体清め心を新たにして形の事を忘れ只有難き一心にかりて天地生々の元氣を迎へ日徳即ち心神を我が身体の中府に納め少しもゆるみなく穢きぬ様にする時は天地一体なり天地一体なる時ハ更に我といふものなくして陽徳の充満せる活物の妙理を悟るが日拜の真訣歟此所天心の場合なるべし思ふべし

臆病と疑ひが去ら祢で御蔭ハ顕れぬぞ

此一条ハ神拜の要言なり臆病と疑ひが去ら祢で御蔭が顕れぬとハ臆病も疑ひも皆我なり依て我を離れて活物を捉えざれば神徳霊験の顕るゝ事なしとなり道歌にも祈りても験しなきこそ効しなれ已が心に誠なければ

ばとあり故ふ我を離れて有難一心よなり萬事天よ任せて疑を離れ誠一つよふらされバ御蔭ハ蒙らるるなり

活物ハ息する物といふ事で人間も勿論鳥畜類よ至る迄天照る神の御神徳ゞ二六時中よ鼻と口より通ひ玉ふ故生て居らるゝ何と有難く尊ひ事でい御座らぬよろ

此一条ハ活物を捉える條目の結束ふり息をるとはいさりきたりすると云夏ふり通ひ玉ふとハ譬へば天照大神の御神徳ゞ糸筋の如く人の肉躰よ引續きてあるをいふ義よて尊ひ事此上もない御神徳ゞ入り替り〳〵新らしくいたりきたるとをる で活て居らるゝふり有難き尊き事限りふきゆ何とも言ひ方のなひ事故只有難ひ尊ひとの為仰せらるたる故此有難い事ゞ知るる所まで常よ信心して

本心より有難き事を了得するゞ活物を捉えるゞ眼目ふりとそ

迷へば魔寄ると申て人の心ゞ迷ふ時ゝ其虚へけこみ悪魔ゞ寄り集りて様々の因果崇りを致す油断とからぬそ

此一条ハ我を離るゝ條目の結束ふり迷ひとハ愆ちといふ義ゝて誤り仕そこふひの出来る事ふり思てゞ知らゞ誤り仕そこふひの出来たる時ゝ速やゝゝ改め直して善ゝ移れバ又一段道ゝ進むなり其時ゝ格別ふ有難きふり然るゝ誤りて改め直さぬ時い大きふる過ちゝて是ゞ即ち迷へば魔寄るふて禍神の寄り集り種々の因果崇りを致す事あり恐ゝ慎みて御神徳を昼夜怠りふく毎も一身ゝ充ち満て有る様ゝ透間の出来るを云ふ故ゝ心ゞみちゝたれバ禍津神の寄る所なし少

しかても陰氣ゞ萠せ時ともや透間ゞ出来我
を離ま得ざるなり故ま油斷ハからぬぞと誡
め給ひしなり
右ハ宗忠の神神去り給ひし後予疾ひ氣枯の
ある時ハ昔神の講話まあらハまし御詞をた
ゞひ出るまにく口號みて御蔭をかふむり侍
ひしが歳を經るまくま遺忘せん事を恐れ且
家内やうらまで御蔭を蒙らせたく思ひ其十
ゞ一二を筆記し楣向ま掲げ侍ると爾云菅の
屋主人謹ま誌れ
菅の屋主人ハ岡山縣士族本教大講義星島良
平大人れ李

道の栞俚諺解終

明治十七年十二月廿四日版權免許
明治十八年一月刻成 定價拾五錢

原著者　星島良平

註釋人　岡山縣士族　三宅重造
岡山縣備前國畧山區
岡山新道五十六番地

出版人　岡山縣平民　蓑浦平八郎
岡山縣備前國御野郡
上中野村十六番地寄留

韓陽堂

特35
879

014654-000-0

特35-879

道乃栞俚諺解

星島　良平／稿

M18
ABB-1086